

## 『駒場の70年』と進学情報センター

永井 久美子（進学情報センター）

東京大学出版会より昨年、『駒場の70年 1949-2020——法人化以降の大学像を求めて』が刊行された。この本で進学情報センターの歴史について執筆する機会を得て、諸資料を調べてみて感じたのは、後期課程への進学をめぐり、学生が今も昔も悩み、迷い続けてきたことであった。

進学情報センターが誕生したのは、1989年である。ただしそれ以前にも、駒場には「進学相談室」が存在していた。学生との対話を重視した初代教養学部長の矢内原忠雄先生が学生課を学生部に拡大改組し、教官職の厚生課長として西村秀夫先生を迎えた1951年に、相談対応のルーツを辿ることができる。進学と留年をめぐる相談が特に多かったことから、西村先生はのちの1969年に、進学相談室の専任とされた。この進学相談室と、相談室内に設けられ、西村先生の後任にあたる遠藤郁夫先生のときに拡充が進められた、便覧等を揃える「進学ガイダンス・コーナー」が、現在の進学情報センターの相談室と資料室のそれぞれ前身にあたる。

「進学情報センター」への名称の変更が象徴するように、1989年のセンター発足時には資料室に端末が導入され、進学志望状況等がコンピュータで検索できるようになり、学生が自主的に情報を集めることのできる場所としての性格がより強まった。調べ方に変化はあっても、学生が求める情報の本質は変わらないのだろう。自分の成績で、希望する学部学科に進学ができるのか。進級ができるのか。単位が取れるのか。そもそも、どのような学部学科があるのか。そうした不安や疑問を持つ学生たちの存在が、進学相談室そして進学情報センターを生み出す原動力となったと考えられる。

センターの専任教官および教員は、那須崇夫先生（担当1987～1995、物理）、波田野彰先生（担当

1995～1999、物理）、里見大作先生（担当1999～2009、生物）、斎藤文修先生（担当2009～2016、物理）と代々理系であったが、2016年以降は、青木優先生（化学）と永井（国文・漢文学）の文系・理系2名体制となっている。今年2月、波田野先生の訃報に接し、筆者自身が学生であった砌にお世話になった先生の逝去に寂しさを覚えると同時に、センターの歴史も長くなってきたことを改めて実感したところである。

筆者がセンターの教員として着任して5年強、まだまだ未熟ではあり、教養学部の70年の歴史を考えれば日は浅いが、学生との面談を重ねてゆく中で、相談内容には、ある程度の傾向があるようにも感じている。毎年変動するため答えかねる、何点あれば〇〇学科に進学できるのかといった質問や、教務課に尋ねた方がよりよいと思われる履修登録の方法についての質問などを除けば、進学単位AとBに迷い決めきれない、興味関心の幅が広く一つに絞ることができない、△△に関心があるがどの学部学科で学べるのか、□□が好きだが就職に結びつけられるか、といった相談を頻繁に受けてきた印象がある。選択を誤りたくないという思いと、大学で学んだことは卒業後に果たして役に立つのかという不安が、背景には広くあるように感じられる。

決断するのが怖い気持ちや、後悔したくないという思いは、その強さは人それぞれであっても、どうしても湧いてくるものなのだろう。あの時AではなくBにしていたらどうなっていたのだろうかといった考えは、仮に逆の選択肢を選んでいたとしても、ふと何か疑問を持ったりしたときに湧き上がってくるものと思われる。どちらが正解なのかは、実際には、本人が納得できているかどうかにかかるところが大きいのだろう。失敗を恐れる学生を多く見かけるが、失敗か成功かは、実は自分が決めていることも多いようだ。Bという道もあったかもしれないが、Aの道を進んでいる自分を認め、自信を持つことができたならば、それが正解なのであろう。

進学選択には、すべての学生が第一志望の学部学

科に進学できるわけではないという厳しさも、現実として存在する。希望が通らなかった場合の悔しさは、すぐに消えるものではないだろう。それでも、進学先で頑張ろうと思えるかどうか、その後の鍵を握っているように思われる。精神論を説くつもりはないが、進学選択に必要となるのは、所定の単位と成績のほか、決意であるように感じている。身を置いた環境で頑張ってみようと思えたならば、別の対象に関心を持ち始めるなど、新たな道を切り開くこともあるだろうし、卒業まで頑張り、大学院進学時や就職時に異なる分野を選ぶという道もあるだろう。進学選択は確かに重要ではあるが、人生はその後も続き、変えてゆけるものであると念頭に置くと、第一志望以外に内定した場合の落胆や志望登録時の決断をめぐる不安が、少しは和らぐのではないかと思われる。

進学先がどうしても合わないと感じるのであれば、内定を辞退し、次年度の進学選択に参加するという手段もある。卒業年が先延ばしとなることは、迂回路に見えるかもしれない。しかし、それで自分が納得できる道を見出せるのであれば、本人にとって良い方法である場合もある。大学に合格したばかりの新入生も読者に多いところ、第一志望以外への内定や留年といった暗い話が続いたが、決して不安を煽ろうとしてのことではない。進路の悩みは多くの学生が共通して抱えてきたものであり、一人で抱え込まずに相談してもらえればと思いつつ、進学選択に臨む学生への励ましの気持ちを込め、この記事執筆している。

決断というものは、締め切りがないと先延ばしにしてしまいがちなものである。自身に合う道を見定める一つの機会として、2年次の夏と設定されている進学選択をむしろ活用する意気込みで臨むのも、一案であるだろう。学生時代から年を経ても、「光陰矢の如し」「少年老い易く学成り難し」といった諺が現実味を帯びてくる。分野を選ぶまでに迷い続けて長く苦しむよりも、決断し、進めてみて、どうしても違和感があれば変えてゆく方が、前進を感

じられるだろう。

進路を決めるうえで、好きなこと、得意なことを選ぶのがよいと言われがちであるが、それらを社会で役立てることができるのかという不安と疑問もまた、多く寄せられる相談である。筆者が専門とする古典文学は、何の役に立つのかという質問を複数回受けてきた分野の一つでもある。役に立たなくても好きなことをと勧める答え方もあるのだろうが、自分が好きなこと、得意なことを役に立てる道を考え、開拓する方法を検討してみたいと、個人的にはよく話している。これを学んだらこういう職業といったような先入観でみずから選択肢を狭めずに、自分の才能をもっとも社会に還元できる方法は何であるのかを自由に考えてみることで、従来とは異なる新たな道に繋がることもあるだろう。

2022年も、進学選択シンポジウム「私はどのようにして進路を決めたか」を開催する。4月19日(火)と4月21日(木)の2日間にわたり、各学部の卒業生ないしは教員から、なぜその分野を選ぶに至ったかという経験を聞くことができる機会である。人生の先輩たちの体験談を聞くことで、世の中にはいろいろな決め方があり、さまざまな道があると知ることができるだろう。

すべてが予想や希望の通りに進むとは限らず、思いがけない変化に富むであろう先々の世界において、どう自分を活かし生き抜いてゆくか。その知恵を、まずはシンポジウムの登壇者たちから学んでもらえたらと思う。卒業生との交流については、キャリアサポートセンターなどを通して、他にもさまざまなチャンネルが用意されている。そして進学情報センターの青木先生も筆者も、進学選択(当時の名称は進学振分け)の経験者である。教員としてだけでなく、卒業生としても、アドバイスできることがきっとあるだろう。駒場の長い歴史が輩出してきた卒業生たちから、今後多くを学んでもらえたらと思っている。